

特 102

459

小北寅之助著

# 創造と改造

CONSTRUCTION AND RECONSTRUCTION

By Rev. T. Kokita

基督教文協會刊行

1919



# 始



特102  
459



小北寅之助著

創造と改造

基督教興文協會

大正  
8. 6. 28  
内交

基督教興文協會の事業は、日本の基督教徒及び未だ基督教を信ぜざる人々の需要に適したる基督教文學の著作及頒布にあり。本協會は日本に在る基督教ミッシヨンの同盟を代表せるが故に公同的精神を以て立てるものなり。されば本協會の會員及び維持者は必ずしも本協會に於て發行せる書籍に現はれたるすべての意見に同意せるものと認むべからず。

緒言

緒言

大戦の終熄と共に「世界改造」新時代實現の叫は内外に喧く、國際に政治に經濟に其他萬般の事物に大革命を加へ、以て永久の平和を謀り、人類の幸福を地上に創造せんと企つる今日に於て、動もすれば其本を忘れ、其末に奔る傾向の歴然たるを見るのである。聯合國の奮闘努力は克く獨逸帝國を滅し、軍國主義専制主義を打破し得たりと雖も、而かも内心の敵は猶依然として人類各自の衷に残存して其勢力を振つて居る、之を克服せざれば永遠の平和、人類の幸福は望まれない。こゝに最善の努力を要するのである。而して此の内敵を滅す智慧と能力を與ふるものは何であらうか。予は一卷の聖書であると思ふ、聖書は神の言葉にして所謂聖靈の劍である、内敵と戦ふには之が必要である。世人往々聖書を以て單に基督教徒の専有物の如く見做して之を繙かない、世界の真相、歐米人の心理状態の了解されないのは當然の事である。予は此の空前の革新時機に於て、何人も現代人の理想の源たる

聖書の内容を知る必要があると思ふ。故に予は聖書の内容を世に紹介せんが爲め、  
淺學菲才を顧ず此の書を認め次第である。更に本書の内容を一言すれば、本書  
は現代思想を以て舊新兩約聖書の心髓と思はるゝ箇所を極めて簡単に説明したもの  
である。一片の小冊子固より不徹底を免れないが、讀者に聖書を紹介し、且つ聖書  
解釋の一小關鍵たるを得ば予に取て過分の幸である。

大正八年四月下旬

小北寅之助識

目次

天地の創造……………	一
アブラハム……………	六
十 誠……………	一四
智慧文學……………	二二
平和の理想……………	二八
神子の降世と世界の改造……………	三六
最大の賜……………	四〇
山上の垂訓……………	四六

# 創造と改造

## 天地の創造

(創世記第一章)

はじめかみてんちをつくり。地は定形なく曠空くして黑暗淵の面かみにあり神の靈水の面を覆ひたりき。神光あれと言たまひければ光ありき。神光を善と觀たまへり、神光と暗を分ちたまへり。神光を晝と名け暗を夜と名けたまへり夕あり朝ありき是首の日なり。

創世記第一章は天地創造の由來を陳べたものである。之を天地の傳と云ふ事が出来る。論語開卷第一の語「學而」の二字は論語全篇の意義を代表して居ると申す事であるが、聖書の冒頭「元始に神天地を創造たまへり」との一句は、聖書全篇の源泉と申す事が出来る。其處に神の出處につき一言半句の説明もない、又神の存在につき何等證明する言葉もない、「無より天地を生じ、神聖其中になります」と曰ふ開闢

説とは天地の相違にして、神は無限の大初より存在し給ふ實在者であつて、天地の大原因、宇宙の創造者なる事を自明の眞理として顯してある。實に驚嘆すべき絶大文字である。

『地は定形なく曠空くして黒暗淵の面にあり』宇宙混沌として水天未だ分れず、暗黒朦々の裡、天自ら動き地自ら動き萬有悉く神意の命ずる如くに出現し來るを見る。神光あれと言ひ給ひければ光ありき。吾等之を讀んで自ら壯大の感に打たれ、崇高偉大の念滿身に漲るを覺え、ひとり襟を正すを禁じ得ないのである。

神其像の如くに人を創造たまへり即ち神の像の如くに之を創造り之を男と女に創造たまへり

神と天地の關係は以上記載せる如くなるが、爰に又神と人との關係が顯してある、之も亦本章の示す一大眞理である。神は人間を神の御姿に象りて創造し、之に靈性を附與して萬物の上に置き給うた。然れば我等人間は自然と運命を共にし、自然と共に榮え、自然と共に亡ぶる者でない。娑羅雙樹の花の色を示す處のものは肉に屬する生命である、我等は自然と共に榮え自然と共に衰へざる或者を有して居

る、靈性は即ち其れである。我等の靈性は自然に超越し、無窮に榮ゆる貴き神の肖像を有して居る。古びて裂け手垢つきて文字も明かならざる壹圓の紙幣は、何等役に立たないものである、之を野蠻人に見せ評價せしめば半紙一枚の價値もないものである。然れども之には政府の印がある、之れこの紙片を貴からしむる所以である。我等は此世の罪に汚れたりと雖、猶靈性に神の印を有するものである、之を磨けば不朽の光明を放つのである。

人間の根本的自覺は此處にあるのである。今やデモクラシーの思想は世界を風靡して居るが、此思想は新渡戸博士の云はるゝ如く、一時突發した所謂時の流行説でなくて人類社會の起源當時より潜伏して居る思想である。此創世記にあらはれた人間の價値は其根柢であつて、何千年の間、今日迄あらゆる方面の壓迫を受けて萌出づることの出来なかつたのが、今日になつて漸く聲を高めたのである。故に其根柢は甚だ深いもので、獨逸の暴力を以てしても尙喰ひ止め得なかつた事は、我々の目前に現れた事實である。今回の大戦により著しく聖書の眞理が世に顯はれて來たのは

實に痛快と云はねばならぬ。神を識らず、己が神の肖像たる事を自覺せざるデモクラシーは、動もすれば淺薄なる群衆主義に傾き實に危険千萬である。我等は又此章を讀んで、天地創造の目的を知る。人の創造は特別の創造であつて、造と云はず特更に創造と云ふ、天地創造の最終目的は人であらねばならぬ。水陸天體山川草木禽獸蟲魚は、神が天地万有を造り給ひし目的でない人間は其目的である。人を造らずに天地創造の目的は達せられないのである。

神の像にかたどりて造られたる我等人間の目的も亦人にあるべき筈である。金銭や土地や衣食は事業の目的とすべきものでない、其れは手段である。我等は人を造るを以て最終の目的とし、之が爲めに努力せねばならぬ。

神彼等を祝し神彼等に言たまひけるは生めよ繁殖よ地に満溢よ之を服從せよ又海の魚と天空の鳥と地に動く所の諸の生物を治めよ。

神の肖像にして天地萬物の目的たる人間は、萬物を服從せしむる權能を授けられたものである。神は天地の中より生れたものでない、人も自然の子でない神の子で

ある。此自信自覺を有するものは天然自然の奴隷にならない。天然自然の前に驚嘆萎縮するものでない、天空海洋風雨電雷地上地下悉く之を服從せしめて人間の用に立つる元氣生命を發揮し來るのである。之が天然を利用する諸種の發明の起る源である。我國民の心に此信念が起つて來れば天然を利用する上に數倍成功するであらうと思はれる。余は幼少の時父母の感化により、天満天神、弘法大師、稻荷大明神等の神々を信じて居た。所謂多神教の信者であつた。小學校に入りて歴史を學ぶやうになり、余の信ぜし神々は皆人の位に下がつて、信神の心は煙の如く消えて仕舞つた。然れども當時の小學校教育は米國の教育制度に倣つたもので、其教科書中には『神は天地の主宰にして人は萬物の靈なり』と教へてあり、又『一心愛天』と題する修身書を學んだものである。信神の心を失いたる余の心に一道の光明を與へたものは此等の言葉であつた。斯くて此宇宙間に人間の崇拜すべき何者か存在するやうに思はれて、口に無神論を唱へ人の信仰を罵る時、痛く良心に責められた。而して余は十八九歳の頃に至りて始めて聖書を手にし、此創世記を讀むに至りて、始

めて此宇宙を創造し給ひし獨一眞神の存在を認め、基督教は無神教の佛教、多神教の神道、人の手にて造りし神を拜する偶像教と全然異なる點あるを發見し、此神を信ずるやうになつた。

思ふに此創世記第一章に録されたる超自然の獨一眞神を信する信仰と人は神の肖像なりとの自覺は、聖書全篇を貫く信仰の根本義であつて、人間最高の理想である。此信念あるものは政治家にまれ、教育家にまれ、又實業家にまれ、偉大なる理想を以て活動して居る我國の政治家や教育家が、多くは只現在の實地問題に没頭して高遠の理想を缺くは此信念なきが故である。又實業家の往々目前の小利に目眩み、約束に背き粗製濫造を事とし、永遠の利を失ふも亦此信念なきが故である。然らば此聖書の眞理を學ぶ者、我國民に對する責任の重且大なるを思はねばならぬ。

アブラハム

アブラハムは偉大なる人格者であるが、彼は軍人ではなかつた、又立法者でもな

ければ文學家でもなかつた、彼は信仰の人であつた。太古、アブラハムの時代にも天地の神を信ずる者が無いではなかつたが、其信仰たるや極めて幼稚であつて、其神の觀念は朦朧として朧月夜のやうなものであつた。アブラハムは獨一の神を信じ、其信仰を明確に世に顯はし、獨一神教の祖と仰がるゝ人となつた。彼の時代は盛に移住の行はるゝ時代であつたが、其移住の動機は或は牧畜の爲め、或は商賣の爲め、或は冒險的征服的性情の衝動の爲めであつて畢竟肉に屬する願望を満たさんが爲めであつた。アブラハムは然らず、彼が移住の動機は神の召命であつた。彼は神の聲を聽て立つたのである。

爰にエホバ、アブラムに言たまひけるは汝の國を出で汝の親族に別れ汝の父の家を離れて我が汝に示さん其地に至れ。我汝を大なる國民と成し汝を祝み汝の名を大ならしめん。汝は祝福の基となるべし。我は汝を祝する者を祝し汝を誑ふ者を誑はん。天下の諸の家族汝によりて福祉を獲さ。アブラム乃ちエホバの自己に言たまひし言に従て出たり、ロト彼と共に行き、アブラムはハラランを出たる時七十五歳なりき。(創

世紀十二章一節より)



是實に彼が移住を決心せし動機であつて、他の移住民と選を異にする所である。爰に吾人の大に學ぶべき處がある。吾人は己が心のまゝに進退去就を決すべきものなるか、肉慾や名譽は吾人の行爲の動機なるべきか。決して然らず。吾人は先づ神の聲を聞かねばならぬ、神の召命に應じて立たねばならぬ、これ實に舊新兩約全書を一貫せる眞理である。アブラハムが神の召命に従ひて立ちし如く、ガリラヤの漁夫は基督の「我に従へ」との命令に従つて進退を決したのである。神の御聲これ實に我等の進退を決する動機であらねばならぬ。余は爰に移住者の模範としてアブラハムの事を考へて見たいと思ふ。移住と信仰の關係は頗る興味ある問題である。信仰が動機となつて移住を企つる事あり、移住して信仰の心を起す事あり、一樣ではないが往々密接の關係あるを見るのである。思ふに此世を以て凡ての世界と考ふる此世限りの人世觀を有する人は目に見ゆるこの世に執着する事強く、住み慣れし家郷を離るゝ事極めて至難である、容易に移住の決心が出来ぬ。然れども信仰の眼を以て無窮の靈界を見るものは理想の郷土を造らんとして移住の決心をなし易いのである。

信仰なき者は成功しても失敗しても古郷に歸る心の生じ易いものであるが信仰あるものは然らず、希伯來書の記者は斯く申して居る。

此等は皆信仰を懷きて死に未だ約束の者を受ざりしが遙かに之を望んで喜び地に在るは自資旅なり寄寓者なりと言ひ。如此いふ者は家郷を尋る事を表す也。彼等もしその出し地を念はり歸るべきの機ありしなるべし。然れど彼等は更に愈れる所すなはち天に在るを慕へり (希伯來書第十一章十三節以下)

人間至る處青山を見出し、絶海の孤島にも生を樂む事を得るは、神と偕に居る信仰の賜である。移住者をして新たなる天地に生を樂ましめ成功を遂げさせ得る力は信仰より來るものである。

アブラハムは移住地に於て第一に何をなせしか、彼は壇を築きてエホバを拜した。彼處にて彼己に現れたまひしエホバに壇を築けり (創世記第十二章七節)

彼は獨一の神を拜するを以て人生の第一義と心得た。波多野鶴吉氏は我國實業界に於ける大成功者の一人なるが、彼は成功の秘訣を論じて「確信は成功の第一要素なり」と曰れた。人は確信ありて能く萬難に耐へ、物議世評を意に介せず直進邁往す

る事が出来るのである。アブラハムの成功せし第一要素は此確信にあつたのであらう。而してアブラハムは常に確信を有せし而已ならず、之を形體に顯はした即ち壇を築きてエホバを拜した。是亦吾人の學ぶべき好模範である。

アブラハムは古來信仰の父と呼ばれ、其生涯は信仰の意義を最もよく顯はして居る。故に希伯來書の記者はアブラハムの生涯を以て信仰の意義を説明して居る。

信仰に由てアブラハムは承繼すべき地に往きの命を蒙り之に遵ひその行くところを知ずして出たり。彼また信仰に由りて異邦に在が如く約束の地に寓り同じ約束を相嗣るイサク、ヤコブと共に幕屋に居り。そは神の造營める所の基ある京城を望めば也（希伯來書第十一章八節以下）

先見の明は人生に於ける成功の一大要素である。將來に起るべき事件を豫め明瞭に見て、之に適當なる意味を與へる力は成功に缺くべからざる能力である。先見の明なくして業を企つる事は出来る、然し其企ては事實と齟齬して失敗に終るの外はない。信仰は望む所を疑はず未だ見ざる所を憑據とするものであつて、未來永遠にあるもの、實在を信ずるものなるが故に先見に補益する事決して少々ではないので

ある。今回の大戦に當り、我國の専門家多くは先見の明を缺き、クリスチャンの常識を以て豫想した通り聯合軍の勝利を見る事を得た、クリスチャンに先見の明があつた。

これ信仰の賜である。アブラハムは篤き信仰を以て未來に起る事件を先見して居た、而して人生に於ける大成功を成し遂げたのである。吾人が人生に成功せんと欲せば先づ先見の明を養はねばならぬ、先見の明を養はんとせば先づ信仰を養はねばならぬ。

又アブラハムが財産に對する態度は大に學ぶべき事柄である。凡そ神に對する正しき思想を有する者は人に對する正しき思想を有し、又財産に對する正しき思想を有する者である。

アブラハムは財産を造る事に非常な特長を有つて居た、彼は埃及に居る間に夥しき財産を造つた、彼の甥ロトもアブラハムの祐助により多分の所有物が出来た。財産は或場合には人を近づけるものであるが、或場合には人を遠ざけしむるもので

ある。アブラハムとロトが所有して居た財産は兩人の間を遠ざからしむるものであつた。財産の餘りに多かりし爲めアブラハムの牧者とロトの牧者の間に紛擾が起つた。此時に當りアブラハムは「我等は兄弟の人なれば請ふ我と汝の間およびわが牧者と汝の牧者の間に競争あらしむる勿れ」とて財産の爲め争ふ事を避けた。彼は信仰を以て人生の第一義とせしが故に財産に囚はれなかつた。「人の心と降る雪は積るにつれて道を忘るゝ」は世の習ひなるが、アブラハムは財産に富み又信仰に富み、神を畏れ神を愛の中心點とし、神の命には絶対の服従をなし、富むと雖神と財とに兼事へんとする如き事は斷じて爲さなかつた。彼も不完全なる人である、幾多の過もあつた、然し信仰の人として我等信者の鑑であつて、特に移住者の好模範である。余の一族が北海道に移住せし動機は固よりアブラハムの如き高尚なる動機に由るのではなかつた。然し獨一の神を信ずる信仰に密接の關係あるは明白なる事實である。余は信仰と移住の密接なる關係を實地經驗したものである。我一族が北海道に移住せし由來を調べれば其淵源は京都の同志社に關係があるのである。余が同志社

に在學せる今より三拾有餘年の昔の事であつた、同志社に在學の中山光五郎氏休暇を利用して丹波教會に傳道し居られしが、同窓の留岡幸助氏を同教會に紹介せられ、留岡氏は丹波教會の牧師となられた。數年の後留岡氏は北海道集治監教師に轉ぜられ、本道の事情を審かにし、丹波教會の先輩に本道を紹介し、移住を勧誘せられた。之が同郷人の移住する動機となつたのである。我一族も信仰を同するの故を以て先輩の指導を蒙り移住して今日の幸福を得たのである。今や國際上の大勢は國際聯盟の實現を可能ならしむる程に進歩し、武力を以て他國を侵略する事を許さず、而して我國の如く人口無限に繁殖して、今日ですら國內に包容し切れぬ程に膨脹しつつあるも開くべき土地なき國柄にあつては、海外に移住するより外に道は無いのである。是を以て我國民は外國に移住するの資格を養はねばならぬ、而かも我國の國民教育は此資格を養ふに適しない。世界的の人を造るには世界的の教に依らねばならぬ。信仰の父アブラハムの信ぜし獨一眞神の教は、我國民をして世界的ならしめ、此問題を根本的に解決する唯一の道であると信するのである。

十 誠

神の一切の言を宣て言たまはく我は汝の神エホバ汝をエジプトの地その奴隷たる家より導き出し、  
者なり、汝我面の前に我の外何物をも神とすべからず、汝自己のために何の偶像をも彫むべからず  
又上は天にある者下は地にある者ならびに地の下の水の中にある者の何の形状をも作るべからず、之を拜  
むべからずこれに事ふべからず我エホバ汝の神は嫉む神なれば我を惡む者にむかひては父の罪を子にむくい  
て三四代におよぼし我を愛しわが誠命を守る者には恩恵をほごして千代にいたるなり

(出埃及記二十章一節より六節迄)

イスラエル人民は一神教の祖アブラハムの子孫なるが故に、其感化に由り、獨一  
の神を信じ、宗教に於ては世界に冠絶する人種である。然れども埃及に移住し、永  
く偶像を拜する國民の間に在つて、朱に交れば赤くなる譬にもれず、偶像を造つて  
之を拜する者が出来たのである。而して神の導きにより埃及國を出でし後尙偶像を  
拜する者が無いではなかつた。此十誠は當時彼等の中に偶像禮拜が行はれて居た事  
を暗示して居る。

我等基督信者も動もすればキリストに由りて世より救ひ出だされ、バプテスマを  
受くる時、何者よりもキリストを愛する事を誓約しながら、知らず識らず、此世の  
風習に感染し、或は神と財とに兼ね事へんとし、或は全然黄金の偶像に事へんとす  
る罪に陥るものである。イスラエル人民に十誠の必要なるが如く、我等信者にも亦  
必要である。

十誠中『なんぢの神は嫉の神とある』は一寸解し難い事である。嫉むは良くない  
事である、然し神の嫉は惡念をふくむものでない、神の熱愛である。神は盲目的勢  
力でない、無感覺の理でない、天地宇宙の創造者、維持者、主宰者なるのみならず、  
至仁至愛なる父である『神は愛なり』とは倫理の神を最もよく顯はしたる言葉であ  
る。我は我、他は他、彼苦むも亡ぶるも我關せず焉、彼喜ぶも我に何かあらんと、  
之れ愛でない。イスラエルは神の子供である、特に神の嫡子である、此嫡子が惡魔  
の手に落ち、偶像を拜して神子の品位を失墜するに至つては、愛なる神の心熱せざ  
るを得ないのである。嫉みの神とは人類を我子として愛し給ふ神の愛を顯はす語で

ある。故に十誠は熱烈なる愛心より出でたる天父の誠である、學者の腦中より出でたる理窟とは違ふ。之を讀む者は深く神の愛に感激し、其誠を遵奉して以て、神の聖旨を安んじ奉る心掛けがなくてはならぬ。

神はモーゼに由り『我は汝等を埃及の苦役より救ひしエホバなり』と前提して此十誠を授け給うた。神は人間の概念ではない、宇宙萬有に内在して時々刻々に之を維持し、之を進化發展せしめ給ふ實在者である。事實上に動作を現はし給ふ神である。イスラエル人民が過去を回想せば、自己を埃及の奴隷より救出せし神を認識する筈である。神は此實驗に訴へて唯獨の神を拜すべき誠を垂れ給うたのである。

凡て人類は自然に宗教心を有する者であつて科學者も之を認めて居る。如何に未開の民と雖も何者かを拜して居る、或は日月星辰を拜し、或は祖先を拜し、或は英雄の靈を拜し、或は人の手の工なる偶像を拜して居る。我國の如きは神の數の多きを貴び、八百萬の神々を拜して居る。獨一眞神を知らざる人民に在つては止むを得ざる事である。眞神を示さずして之を打破せんとするも徒勞である。此十誠は既に

眞神を識り其特別なる保護を受けし者にして、此等の劣等なる信仰に墮落せしイスラエル人民に授け給ひし誠であつて、事實に基づき實驗に訴へ、明かに獨一眞神の存在を示して迷信の打破すべきを誡めたものである。

今回の大戦争により武力を以て世界を統一せんとするカイザルの迷想は見事に失敗し、正義人道自由の大理想は全世界を風靡し、國際問題も此理想に由りて統一されんとして居る。而して我國の思想界を見渡せば、佛教あり、儒教あり、神道あり、基督教あり、又種々の迷信あり、國民の思想紛々擾々として亂れて麻の如く少しも統一する處なく、最も危険なる状態に居るので思想上の煩悶時代である。我國の政治家教育家大に之を憂ひ、思想の歸一を謀らんとして、之が教育調査會の問題となり、數々討議せられて居る。而して彼等の結論は我國國有の文化を以て我國の思想界を統一し、危険思想を防止せんとするのである。之れ新しき酒を舊き革囊に入るものであつて囊はりさけ酒もれいで、其囊も亦壞るゝのである。十誠は彼等に大なる教訓を與へる、十誠は先づ積極的に獨一神の實在を示し、而して消極的に迷信打

破を教へて居る。此筆法に由らざれば勞して功はないのである。我國は世界に於て最も優秀なる宗教を選び、之を以て人心を統一し迷信を打破するより他に道はないのである。其には大勇斷を要する、我國民に此勇斷が出来るであらうか。又この十誠は信仰と道德との併行を示して居る。神に對する心の態度正しくば人に對し、財産に對し正しき心の態度を有つ事が出来る。十誠は信仰を基礎とし、其上に道德律を立てたものである。第一第二第三の誠を守り誠心誠意獨一の神を拜する者は、第四以下の誠は自ら守り得らるゝのである。信仰をぬきにした徳育は効果を見ると不可能である。今や敬神の徳教に必要なを感じ、神社を以て信仰の對象となさんとして居る、然し之が國民の道德を高め得るやは疑問である。

安息日を憶えてこれを聖潔すべし。六日の間勞きて汝の一切の業を爲すべし。七日は汝の神エホバの安息なれば何の業務をも爲べからず汝も汝の子息息女も汝の僕婢も汝の家畜も汝の門の中に入る他國の人も然り、其はエホバ六日の中に天と地と海と其等の中一切の物を作りて第七日に息みたればなり是をもてエホバ安息日を祝ひて聖日としたまふ（出埃及記第二十章八節より十一迄節迄）

十誠の第四誠は安息日の誠である。此誠は創世記第一章の天地創造説に基づくものであつて、神の肖像たる人間は神の御業に倣ふべきものなる事を暗示して居る。此誠に由れば六日の間勞きて一切の業を爲べし、七日は汝の神エホバの安息なれば何の業務をも爲べからずとあるが如く、働く可き時に働くの義務なるが如く、休む可き時に休むは同じく人の義務である。我國民は働く義務を感じずれども休む義務を感じない。故に休日の勵行が難しい、國家の大損失と云はねばならぬ。凡そ宗教は休日と密接の關係を有するものである。三百六十五日働さづくめに働いて居ては、人は一種の器械と化し神に事へる事も徳を養ふ事も出来ない、所謂精神生活は不可能である。人間の心身は弓の如きものである。絶えず弦を張つて置けば彈力を失つて用をなさない様になると同様である。我政府は基督教の行はるゝ國に倣ひ、日曜日をも以て帝國の休日と定めた、而かも信仰なきが故に一般に勵行されず諸官署や學校の休日位に止まつて居るは遺憾である。我國民が獨一の神を信する様になれば實行が出来る。北海道名寄に我同族が設立した名寄木工場は、創立以來十一年になるが

最初より日曜日(にちあがりび)を休日(きゅうじつ)として居る、是は神(かみ)に事(つか)へる爲(ため)めに休(やす)むので、利益(りえき)の爲(ため)でない。然(しか)し其(その)結果(けつこ)は精神(せいしん)生活(せいかつ)の上(うへ)に大益(だいえき)あるは申(まを)すまでもなく、經濟(けいぎ)上(じやう)にも益(えき)あつて損(そん)なき事(こと)を實地(じつち)經驗(けいけん)して居る。今(いま)や世界(せかい)の優秀(いゆうしゆう)なる國々(くに)に於(お)いては皆(みな)この十誠(じふまこと)に示(しめ)すが如(ごと)く安息日(あんそくにち)を守(まも)つて居る。此日(このひ)を守(まも)ると守(まも)らざるとは國民(こくみん)の消長(せうちやう)盛衰(せいすい)に大關係(だいけんけい)ある。決(けつ)して等閑(とうかん)に附(よ)すべからざる問題(もんたい)であると思(おも)ふ。

安息日(あんそくにち)につき兩毛(りやうもう)基督(きりすと)信徒(しんどう)大會(たいかい)に於(お)ける聖日(せいじつ)の聖守(せいしゆ)に關(かん)する宣言(せんげん)は寔(まこと)に有益(いうえき)なる文字(もんじ)なれば此(こゝ)に轉載(てんさい)する。

基督(きりすと)者(しや)と非基督(ひきりすと)者(しや)との相違(さいてい)は一(い)は全(まづ)く宗教(しゆうけう)的生活(せいかつ)を主(しゆ)とし永遠(えいゑん)より永遠(えいゑん)まで變(かは)ることなき神(かみ)の經綸(けいりん)に參與(さんいん)し神(かみ)と共に生(い)き且(かつ)動(どう)く者(もの)なるに反(はん)し、他(た)は全(まづ)く神(かみ)なく靈(れい)なく只(ただ)眼前(たいがん)の物慾(ぶつよく)に囚(とら)はれ終生(しゆうせい)遑々(わうわう)として安住(あんぢゆう)の地(ち)を有(いう)せざるに在(あ)り、左(さ)れば我(われ)等信者(らしんじや)たる者(もの)の特色(とくしやく)は其(その)日常(にちじやう)の生活(せいかつ)をして所謂(いはゆる)心を盡(つく)し精神(せいしん)を盡(つく)し意(い)を盡(つく)して主(しゆ)たる汝(なんぢ)の神(かみ)を愛(あい)すべしと在(あ)るが如(ごと)く、我(わが)人格(じんかく)の全部(ぜんぶ)と我(わが)生命(せいめい)の全體(せんたい)とを捧(ささ)げ活氣(くわつき)活(わ)力(りき)の一切(いっけつ)を盡(つく)して神(かみ)に事(つか)ふる者(もの)とならざるべからず、即(すなは)ち信者(しんじや)の生活(せいかつ)は

一方(いっぽう)に於(お)いてはマルタの如(ごと)く神(かみ)の爲(ため)に奉仕(ほうし)することに心(こゝろ)を用(もち)ふべきは勿論(もちろん)他方(たはう)に於(お)いては亦(また)マリヤの如(ごと)く靜(じやう)かに主(しゆ)の側(そば)に侍(まじ)り我(わが)心耳(こゝろみみ)を澄(す)まして其(その)大命(だいてい)を待(まち)受け其(その)聖旨(せいぢ)に答(こた)へ奉(まう)り苟(いやく)も遺漏(いろう)なからんことを欲(ほつ)するの心掛(こゝろかけ)なかるべからず、六日(むいか)の間(あひだ)の勤勞(きんらう)はマルタを以(もつ)て代表(だいひやう)し、一週(しゆう)の首(はじめ)の日(ひ)たる日曜(にちやう)の聖守(せいしゆ)はマリヤを以(もつ)て代表(だいひやう)すべし、故(ゆゑ)に信者(しんじや)は日曜(にちやう)の聖日(せいじつ)は必(かなら)ず之(これ)を嚴正(げんせい)に守(まも)り此日(このひ)に於(お)いて神(かみ)を禮拜(らいはい)し讚美(さんび)し祈禱(きたう)し宛(あた)かも此日(このひ)に於(お)いて神(かみ)の聖(きよ)くして温(あた)かき家庭(かてい)即(すなは)ち信(しん)と望(ぼう)と愛(あい)との充(み)つる神(かみ)の聖殿(せいでん)に迎(むか)へられ身(み)は正(ただ)しく天父(てんぷ)の膝下(ひざか)に座(ざ)したらんが如(ごと)き心地(こゝろち)を以(もつ)て其(その)使命(しめい)の在(あ)る所(ところ)を拜承(はいじやう)し之(これ)に對(たい)して忠實(ちゆうじつ)に酬答(しうたふ)する所(ところ)なかるべからず、加(くは)ふるに此日(このひ)に於(お)いて神(かみ)より賜(たま)はる生命(いのち)の糧(かて)を十二分(じふにぶん)に喫(きつ)し靈(れい)も肉(にく)も健(すこ)やかに生(せい)長(ちやう)して共(とも)に俱(とも)に天(てん)の父(ちち)の完(ま)つたが如(ごと)く完(ま)つたらんとする理想(りきさう)の下(もと)に神(かみ)と人(ひと)とに對(たい)して奉仕(ほうし)の生涯(しやうがい)を送(おく)り愈(いよ)々益々(いよますます)精神(せいしん)上(じやう)肉體(にくたい)上(じやう)の向(か)うと進歩(しんぽ)とを謀(はか)らざるべからず、若(も)し夫(そ)れ之(これ)に反(はん)し信(しん)者(じや)にして日曜(にちやう)の聖日(せいじつ)を守(まも)らず教會(けうかい)に集(つ)ふことを怠(おこ)るが如(ごと)きことあらんか少(すく)なくとも其(その)人(ひと)の信仰(しんかう)は冷却(れいきやく)し其(その)生命(せいめい)は自(おの)ら枯死(こくし)し亦(また)神(かみ)と人(ひと)との爲(ため)に靖獻(せいけん)すべき高貴(かうき)にして

偉大なる能力を失ふに至らん、是れ我黨の意を致して自今以後益々熱心に此聖日を聖守することを諸君と共に宣言する所以なり。  
以上は十誠中の最大切なる部分を講述したのであるが、其他にも大切なる誠がある、而して此十誠は古のユダヤ人に適切なるのみならず現代の我等にも適切なる神の誠である。

### 智 慧 文 學

ギリシヤと印度とユダヤとは世界三大思想の源泉地である。而してギリシヤは智識の方面に發達して哲學を以て宇宙の眞理を究めんとし、印度は信ずる事なくして知るを求むるギリシヤ人と異なり、又知らずして信じ得るユダヤ人も違ひ、宗教にして同時に哲學である佛教を作つたのであるが、ユダヤ人は知る事なくして信ずる單純性を以て居て希伯來文學の特徴は信仰である。舊約聖書中の智慧文學は信仰の文學である、其最も優秀なる約百記や詩篇の如きものは、悉く信仰の文學である。

余の平素智慧文學中最も愛讀して信仰の糧として居るものは約百記と詩篇である。

約百記はエンサイクロペテア・ブリタニカに希伯來詩歌中の最も壯麗なる傑作なりと書いてある。テニソンも古今詩歌中の最大傑作なりと申して居る。又カーライルは尊貴なる書なる哉萬人の書なる哉、此書は是れ人間の運命と此地上に於ける神の攝理に關し會て止む事なき疑問を論述せる最始最古の書なりと評して居る。

又詩篇の祈禱に就てムーデー氏が嘗て云はれた言葉に「余は天使ガブリエルの能辯を以て説教する事を得んより寧ろダビデの如く祈りするものと成らんとを願ふ」と。吾等は人生問題の解決にも信仰を養ふにも此二書を熟讀愛誦する必要があると思ふ。余は今其中の約百記第廿八章を取つて少しく講述を試みたいと思ふ。

白銀は掘りいだす坑あり、煉るこころの黄金は、出處あり。鐵は土より取り、銅は石より鑄して獲るなり。人すなばち黑暗を破り極より極まで尋ね窮めて黑暗あよび死蔭の石を求む。その穴を穿つこと深くして上に住む人遠く相離れ、その上を歩む者まつたく之を覺えず、是のごとく身を墮下げ遙に人と隔たりて空に懸る。地の上は食物を出し、其下は火に覆へざる、がごこく覆へる。その石の中には碧の玉のある處あり黄金の沙またその内にあり。その巡は鷺鳥もこれを知らず、鷹の目もこれを看す鷺鳥も未だこれを



踐す、猛き獅子も未だこれを通らさず。人堅く磐に手を加へまた山を根より倒し。岩に河を掘り各種の貴き物を目に見えぬ。水路を塞ぎて漏らざらしめ隠れたる寶物を光明に取いだすなり。(約百記第廿八章一節より十一節)

此世の寶は皆人の目に見えざる處に隠れて居る金銀銅鐵金剛石珊瑚水晶是れ皆人跡到らざる深山や底知れぬ海底にある。人間が危険を冒し、努力を惜まざれば之を得る事は出来る。約百記の記者は人間が此等の寶物を隠れたる處から掘出す有様を詳しく觀察して之を詩的に面白く記述して居る。斯く物質物の寶は自然界より掘出す事が出来る、然し智慧は金銀寶石のやうに自然界より掘出す事は不可能である。智慧は何處より求め得ん明哲の在る所は何處ぞや

然らば之を此世の市場に求むべきか、  
人その價を知らず人のすめる地に獲べからず。淵は言ふ我の内に在らず、海は言ふ我と偕ならず。精金もこれに換るに足らず銀も秤りてその價を量るべからず。オフルの金にてもその價を量るべからず、貴き青玉も碧玉も亦た然り。黄金も玻璃もこれに並ぶ能はず、精金の器皿もこれに換るに足らず。珊瑚も水晶も論にたらず、智慧を得るは眞珠を得るに勝る。エテオピアより出る黄玉もこれに並ぶあたはず、純金をも

とするもその價を量るべからず

如何に高價を拂ふも此世の市場に於て智慧を購求する事は是又不可能である。人は黄金萬能を夢みて居る。金さへあれば何でも出来る、如何なるものでも買へると思つて居る人が多いが黄金は斯く萬能でない。此處に金銀を以て買へないものゝある事を示して居る。

然らば智慧は何處より來るや明哲の在る所は何處ぞや  
此問題は黄金を以て解決する事は出来ぬ、

是は一切の生物の目に隠れ、天空の鳥にも見えぬ。滅亡も死も言ふ我儕はその風聲を耳に聞し而已。  
ヨブは大なる艱難苦痛の中に在つて三人の友人と大議論をなした。ヨブの如き義人が何故に斯る災難に遭ふか、如何に考ふるも如何なる哲學者の説を聞くも満足な解決を得ない。ヨブは更に口を極めて神と論じたが遂に無益の論辯に終はつた、結局人間の智識には制限がある。宇宙人生の秘密は人智の知る限りでない。我等は何故に此の運命を有するや、事物は何故に今日の狀態に在るかは到底知り得る所でない

い。之を知らんとして腦漿を絞り、多くの書をつくるは徒勞であつて體疲る、許りである（傳道書第十二章十二節）宇宙人生の秘密は只神の知り給ふ所である。

神その道を曉りたまふ彼その所を知りたまふ

然らば人間は無智に甘んじ、不可議論に満足すべきものであらうか、決して然らず爰に一層大切なる智慧がある、其智慧は人間が此世に於て得らるゝ智慧である。

また人に言たまはく視主を畏るゝは是智慧なり、惡を離るゝは明哲なり。

宇宙の中心なる神を畏れ、自己の中心なる靈性の惡を離れ、而して己の義務に關する智慧を得ば、己と他人の上に落來る有形上の榮辱の爲めに其心を勞する事なく、且つ己が身の措かれたる境遇を了解する能はざるも喜び勇んで此世に處する事が出來る。たとひ患難身に纏ふも「天道是か、非か」と疑つて見たり、「天道様聞えませぬ」と天を怨んだりする様な事はないやうになる。傳道之書の著者は富貴權勢歡樂學問人生の喜びを悉く經驗したる後此結論に達し、ヨブは有ゆる災害を経験したる後同じく此の結論に達したのである。

基督は事實を以て此理を示し給うた。約翰傳第九章に

イエス往くまき生れつきの盲者を見しが其弟子之れに問ひて曰けるは此人の盲者に生れしは誰の罪なるか彼れに由か兩親に由か。

斯る疑問は容易に解決の出來るものでない、又爰に之を解決する必要はない、之を人間が無暗に智的に解決せんとすれば、輪廻轉生説のやうな理窟を案出して、前世に於ける惡業の報なりとして、此人を絶望の深淵に陥れる外はないのである。基督は今爰に此憐れなる盲者を研究の材料として斯る問題に没頭し給はない。

此人の罪にあらず又其兩親の罪にもあらず彼れによりて神の作爲の顯はれんためなり、我此世に在る時は世の光なり。

と曰ひ給ひて此盲者と神とに對する己が義務を顯はし、直に之を救ふ業にかゝり給うた。是れ實に此世に處する眞の智慧であつて安心満足を得る秘訣である。約百記は斯る智慧を教へたものである。

### 平和の理想

(以賽亞書第五十三章)

天地萬物の根本は思想であり、言葉である。神光あれと言ひ給ひければ光あり、諸の世界は神の言にて造られ此く見ゆる所のものは見るべき物に由りて造られざることを知るのである。思想は言葉に由りて連綿として幾百年幾十年傳はるもので、何れの時か之が事實に現はれるものである。現實に囚はれた人は往々思想を輕んじ空想として顧みないが、之れ實に思はざるの甚しきものである。

豫言は聖者が神の聖靈に感じて陳べし言である。其言は現實の世界を超越せる理想なるが故に、現實界に没頭する人々の耳には容易に入らぬものである。然し其言は永遠に傳はりて何れの時か現實界に現はるゝものである。否現實界を造り出すものである。

平和の理想は長かりし三千年の夢であつて、極めて古くよりあつたものである。かの武力を以て世界を征服した羅馬でさへ其聖帝と崇めた人物は、平和を以て理想

とし、年の改まる毎に何より先づ平和の神を祭り、年を一貫して平和の思想を養はんと努めたと云ふ事である。

ユダヤ國に於ては此平和の理想が完全に發達して、鮮かに豫言されてある。

以賽亞書第二章二節より四節迄

すゑの日にエホバの家の山はもろくの山のいたゞきに堅立ち、もろくの嶺よりまたかく擧り、すべての國は流のごとく之につかん。おほくの民ゆきて相語いはん、率われらエホバの山にのぼりヤコブの家の神にゆかん、神われらにその道をなしへ給はん、われらその路をあゆむべしと、そは法律はシオンよりいでエホバの言はエルサレムより出づべければなり。エホバはもろくの國のあひだを鞠き、おほくの民をせめたまはん、斯てかれらはその劍をうちかへて鋤さなし、その鎗をうちかへて鎌さなし、國は國にむかひて劍をあげず、戰鬪のこゑを再びまなばざるべし。

是イザヤに由りて示された平和の理想である。

同第九章六七節

ひそりの嬰兒われらのために生れたり、我儕はひそりの子をあたへられたり、政事はその肩にあり、その名は奇妙、また議士、また大能の神、ごこしへのち、平和の君ごこなへられん。その政事と平和とばましくは、りて窮りなし且つダビデの位にすわりてその國をなさめ、今よりのちごこしへに公平と正義とを

もてこれを立てこれを保ちたまはん、萬軍のエホバの熱心これを成したまふべし。

同第十一章一節より九節迄

エツサイの株より一つの芽いで、その根より一つの枝はえて實をむすばん、その上にエホバの靈さやまらん、これ智慧、聰明の靈、謀略、才能の靈、智識の靈、エホバを愛するの靈なり。かれはエホバを畏るゝをもて歡樂とし、また目みるころによりて審判をなさず、耳きくころによりて斷定をなさず、正義を以て貧しき者をさばき、公平をもて國のうちの卑しき者のために斷定をなし、その口の杖をもて國をうち、その口唇の氣息をもて惡人をころすべし。正義はその腰の帶となり、忠信はその身のおびきならん。おほかみは小羊ごともはやどり、豹は小山羊ごともにし、肥たる家畜ごとも居てちひさき童子にみちびかれ。牝牛ごともはくひものを同じし、熊の子ごともにふし獅はうしのごごとく藁をくらひ、乳兒は毒蛇のほらにたはふれ、乳ばなれの兒は手をまむしの穴にいれん。斯てわが聖山のいづこにても害ふごごとく傷るごとなからん、そは水の海をおほへるごごとくエホバをしろの智識地にみつべければなり。

是平和の君の理想である。而して豫言者は極力武力に反對し、イスラエルが武力強大なる埃及國に同盟する非を鳴らして居る。

同第三十一章一節より三節迄

助をえんさてエツプトにくだり馬によりたのむものは禍ひなるかな、戰車おほきが故にこれにたのみ騎兵

はなはだ強きがゆゑに之にたのむ、されどイスラエルの聖者をあふがすエホバを求むるごごとくをせざるなり。然はあれどもエホバもまた智慧あるべし、かならず禍害をくだしてその言をひるがへしたまはず起てあしきもの、家をせめ、また不義を行ふ者の助をせめ給はん。かのエツプト人は人にして神にあらず、その馬は肉にして靈にあらず、エホバその手をのばしたまはば助くるものも踏づき、たすけらるゝ者もたふれてみなひさしく亡びん。

以上は以賽亞書の第一部第三十九章迄に録されたる平和の理想である。第二部四十四章以下には更に平和の理想が發展して舊約文學の頂點に達して居る。而して第一部に豫言してある平和の君の理想はダビデ王の如く、榮光を以て萬民の上に臨む君主であるが、第二部にはエホバの僕と云ふ言葉を以て其理想を顯はしキリストの人格を遺憾なく描いて居る。

同第四十二章一節より四節迄

わが扶くるわが僕わが心よるごぶわが撰人をみよ我わが靈をかれにあたへたり、かれ異邦人に道をしめすべし。かれは叫ぶごごとくなく聲をあぐるごごとくなくその聲を街頭にきこえしめず、また傷める芦をなるごごとく、ほのくらしき燈火をけすごごとくなく眞理をもて道をしめさん。かれは衰へず喪膽せずして道を地にたてを

はらぶ、もろくの島はその法言をまちのぞむべし。

同第五十二章十三節より末節迄

視よわがしもへ智慧をもておこなはん、上りのほりて甚だたかくならん。眞にはおほくの人かれを見ておごろきたり(その面貌はそこなはれて人と異なり、その形容はおそろへて人の子とことなれり)後には彼おほくの國民にそゝがん王たち彼によりて口を緘まん、そはかれら未だつたへられざることを見いまだ聞ざることを悟るべければなり。

同第五十三章一節より六節迄

われらか宣ることを信ぜしものは誰ぞやエホバの手はたれにあらはれしや。かれは主のまへに芽のごとく燥きたる土よりいづる樹株のごとくそだちたり、われらが見るべきうるはしき容なく、うつくしき貌はなく、われらがしたふべき艶色なし、かれは侮られて人にすてられ悲哀の人にして病患をしれり、また面をおほひて避ることをせらるゝ者のごとく侮られたり、われらも彼をたふさまざりき。まことに彼はわれらの病患をむひ我儕のかなしみを擔へり、然るにわれら思へらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるゝなり。彼はわれらの愆のために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、みづから懲罰をうけてわれらに平安をあたふ、そのうたれし瘡によりてわれらは癒されたり。われらはみな羊のごとく迷ひておのゝ己が道にむかひゆけり然るにエホバはわれら凡てのものゝ不義をかれのうへに置たまへり。

此の平和の君の理想は、ユダヤ人の期待して居た所のものとは全然反對である。榮光と權力とを以て此世に臨むものでない。此世の位置なく位階なく財産なく俗人の慕ふ所のものは一も有しない、彼は人を使ふものでなく、却て人に使はるゝものである。又安樂の人でなく苦難の人である。彼は又羊に譬へられ献身犠牲の人である。彼は苦しめられるれどもみづから謙りて口をひらかず屠場にひかるゝ羊羔のごとく毛をきる者のまへにもたす羊のごとくしてその口を開かざりき。

舊約聖書を通讀すれば、人の苦難に遭ふや必ず叫んで居る。ダビデ、ヘゼキヤ、エレミヤ、ヨブ其他數多の殉教者、詩篇作者、皆苦難の時叫んで居る。罪と疑ひの聲を擧げて居る、神に對して己の罪を懺悔するか、或は己の罪を感ぜざる時は神に對して論争して居る。苦難に黙するは舊約聖書中他に見る事は出来ない。このエホバの僕は何故に苦難に黙するか、彼は彼等の有せざる秘訣を有して居る。彼は自身に一點の罪がない、又神に對する一點の疑がない、そして彼は神が彼に苦難を與へ給ふ目的を知つて居る、又苦難を受けずして人類の罪を救ふ方法なきを知つて

居る。故に彼は其目的を達する爲め全靈全身を献げた。彼の忍びし苦難は神の刑罰でない、又一層高尚なる生命に入る産みの苦みでもない、神より授かりし奉仕である、人間の罪を贖ふ結果あり光榮ある奉仕である、此意味に於て彼は屠場にひかる羊羔である。是れ平和の君の最高理想である。平和問題は人類の罪を救ふ事によりて始めて根本的解決を見るのである。新約時代に至りて此最高理想は事實となつて現れた。『それ道肉體となりて我儕の間に寄れり』とあるが如く此豫言を成就し給うた御方はイエスキリストである。此豫言が人格となつて古今無比なる力ある教となつたのである。イエスは其主義と使命を示して、

イエス彼等を召て曰けるは異邦の領主はその民を主どり大人ごもは彼等の上に權を操り、爾曹が知ること。然るも爾曹の中にては然すべからず爾曹のうち大ならんご欲ふ者は爾曹に役る者となるべしまた爾曹のうち首たらんご欲ふ者は爾曹の僕となるべし。此の如く人の子の來るも人を役ふ爲には非ず反て人に役はれ又もほくの人に代て生命を予その贖ならん爲なり、(馬太傳第廿章廿五節より廿八節迄)

と曰はれた。此世は上に在つて權を取る異邦領主の主義が支配する社會である。少

數の權力者や富豪が多數の人民の上に權を執り、之を使役して居る有様である。然れどもキリストを信するものは人の僕となり此世に平和を來たさん爲め努力を續けて居る。平和の思想は數千年間連綿として歐米の社會に傳はつて來て居るのである。此理想は宗教家の間には云ふ迄もなく學者間にも高唱せられ、第十九世紀に至つて平和を鼓吹する團體は其存在を明かにし、各國競うて平和協會を設け、著書に演説に此主義の傳播に努力するやうになつた。然し其主張は理想より割出され實行難の恨みがあつたので、近來プロツホやノルマンエンゼルの如き、カルネギー財團の如き戰爭なる現象を學問的に研究して平和論の根柢を堅むることに努力して居たが、此回の大戰爭によりて雨降りて地固まる如く、此理想が事實になつて世にあらはれんとし、平和は國際間の中心問題となつて討議せらるゝやうになつた。武力を以て世界を征服し、武力を以て世界を統一せんと企てた獨帝の末路は如何に悲惨なる。上に在つて權を取る異邦領主々義は次第に衰へて人に役はるゝ基督主義が勢力を得るは火を暗るよりも明である。今や戰爭を表はす午の歳の後に平和の象徴た

る羊の年を迎へ、萬國平和會議の實現を見る、實に痛快と云はねばならぬ。

### 神子の降世と世界の改造

(馬可傳第一章)

これ神の子イエスキリストの福音の始なり。預言者の録して視よ、我なんぢの面前に我使を遣さん  
 彼なんぢの前に其道を設くべし。野に呼る人の聲あり云く主の道を備へ其徑すぢを直せよと有が如く、  
 ヨハネ野に於てバプテスマを施し罪の赦を得させんが爲に悔改のバプテスマを宣傳したり、ユダヤの  
 全國およびエルサレムの人々かれに來りて各々その罪を認はしヨルダンといふ河にてバプテスマを  
 受、ヨハネは駱駝の手衣を着腰に皮帯をつかれ蝗蟲と野蜜を食へり、かれ宣傳けるは我より勝れる者わ  
 が後に來らん我は屈て其履の紐を解にも足す、我は水をもて爾曹にバプテスマを施し、が彼は聖靈をも  
 て爾曹にバプテスマを施すべし、當時イエスガリラヤのナザレより來りヨルダンにてヨハネよりバプテス  
 マを受、頓て水より上れるとき天開け靈鶴の如く其上に降るを見たり、又大より聲ありて云なんぢは我  
 が愛子わが悦ぶ所の者なりと……ヨハネの囚れし後イエスガリラヤに至り神の國の福音を傳ひひけ  
 るは期は詳り神の國は近けり爾曹悔改めて福音を信ぜよ。  
 夫すべての人を照す眞の光は世に來り、かれ世にありせば彼に造られたるに世これを識す、かれ己の國  
 に來しに其民これを接ざりき、彼を接その名を信ぜし者には權を賜ひて此を神の子と爲り、斯る人は血脈  
 に由に非ず情慾に由に非ず人の意に由に非ず唯神に由て生れし也、それ道肉體と成て我儕の間に宿れり  
 我儕その榮を見に實に父の生たまへる獨子の榮にして恩寵と眞理にて充り。(約翰傳一章九節より十四節迄)

舊約の創世記は天地創造の事を叙したものであるが、新約の福音書は世界改造の  
 事を録したものと云ふ事が出来る。『期は満てり神の國は近けり爾改悔改めて福音を  
 信ぜよ』是れ福音書の劈頭に於てイエスの宣言し給ひし御言葉である。世界の改造  
 は人心の悔改を以て始まるのである。

イエス降世の目的は人々を悔改させ、世界を根本的に改造し、天國を地上に來さ  
 んが爲めであつた。世界の歴史はイエスの降世を以て紀元とし、世界改造の時期に  
 入りし事を暗示して居る。イエスの降世は此世界に於ける最大の出來事であつて、  
 此出來事は決して突如として來るものではなかつた。數百千年の準備があつた。幾  
 多の預言者が起つて、之を預言して居る。而して其預言は次第に發展進歩してイザ  
 ヤに至つて其絶頂に達し、終に期滿つるに至つて之が實現を見るに至つたので、こ  
 れに眞理は具體的に現はれたのである。第四福音記者之を録して

それ道肉體と成て我儕の間に寄れり、我儕その榮を見るに實に父の産たまへる獨子の榮にして恩寵と眞理にて充り。

と申して居る。或人この理を説いて斯く曰つた。

ギラ／＼したものは甚だ面白くない、光を裸み明を隠すは一種の風雅である。衣物でも餘り色の鮮かなものは良くない。花でも月でも少し陰つた所に言ひがたき味はあるもので之は幽邃青愴の趣味である。況んやこれ赫々たる光明は自から包みこそすれ、他に見せぶらかすものでない、郷に入つて郷に従がひ俗に入つて俗にまじり自から其光を和らげて塵芥穢土の中に混同するは救世濟人の一方法で達人世を濟度するの面目である、潔僻矯激にしてたゞ自らの正しきを見せしめ、世の劣者と同坐しても既に汚がされたるやうに思ふものなどは甚だ小なる者である。高い山から谷底のろくといふ工合で細い糸を下界に垂れたゞ之にすがれと云ふは、無慈悲極まることと申さねばならぬ。凜乎たり煥乎たる氣品の威光を自ら和らげて世の塵中に降り同ずる、同じて塗れず、化せず、久うして遂に其塵をふるひ、其濁を清ます

はたゞ達人之を能くすることである。神、人の姿を執つて塵世に降り没するの福音は即ちこの事であると。

神子イエスの此世に降り給ふや、其郷里はナザレの僻邑であつた、ナタナヘルをしてナザレより何の善者出んやと云はしめた。其職は勞働にして郷黨をして彼は匠人の子に非ずやと叫ばしめた。而して其教を宣傳し給ふに當りバプテスマのヨハネの許に來り、衆庶と共にヨルダン河中に立ちて、履の紐を解くにも足らざるヨハネよりバプテスマを受け給うた、斯くて此世の罪人と伍し、罪人の中に入り、税吏罪人と食卓を共にし、癩病人の客となり、僕の狀を取りて弟子の足を洗ひ、終に天下萬民の罪を贖はん爲め強盜と共に十字架に釘けられ、塵中穢土の中に没し給うたのである。是れ實に神が此世界を改造し天國を地上に來らせ給ふ唯一の道である。世人この理を知らず、たゞ達人之を知る。バプテスマのヨハネ之を知り、ユダヤの荒野に現はれ、大聲疾呼萬民の眠を醒まし、新時代の到來を警告し、悔改のバプテスマを宣べ傳へた。此警告によつて立ちたる者は、世界改造天國建設の聖業に參與す



るの光榮を擔うたのである。爾來年を閱する二千歳、御國建設の事業は着々歩を進め、期は満ち、今また更に新時代を迎へ世界改造の事業に一步を進むるの氣運に際會した。世界の偉人は神の召命を受け天馬空を行くの勢で世界改造の大事業に奮進して居る。我等は之を理解し之に共鳴し其成功を祈りつゝある。今日バプテスマのヨハネをして我國にあらしめば、獅子奮迅の勢を以て國民を警醒し叱咤し鞭撻し大に悔改を促がすであらう。我同胞よバプテスマのヨハネの言に耳を傾け、世界と共に醒めよ。視よ世人の以て空想と冷笑せし理想は、今や現實と化しつゝある。吾人は悔改めて新時代の要求に應せねばならぬ。

### 最大の賜

(路加傳第十五章十一節以下)

また曰けるは或人子二人あり、その季子父に曰けるは父よ我得べき業を我に分予よ父その産を彼等に分たれば幾日も過ざるに季子その産を盡く集めて遠國へ旅行せしが放蕩にして其分資を皆そこにて耗せり、盡く耗し、さき大なる饑饉その地に有て彼さもしく爲はじめければ、往て其地の一民に身を投たり

其一人豕を牧ために彼を野に遣せり、かれ豕の食する所の豆莢をもて己が腹を果さん欲ふほごなれど何をも彼に予る人なし、自ら省悟て曰けるは我父の所には食物あまれる傭人の許多か有に我は飢て死んす、起て我父に往て曰ん父よ我天と爾の前に罪を犯たれば、爾の子と稱るに足らざるものなり傭人のひとり如く我を爲たまへと、即ち起て其父に往り尙さほく有しに其父かれを見て憫み趨往き其頸を抱て接吻しぬ、子父に曰けるは父よ我天と爾の前に罪を犯たれば爾の子と稱るに足らざる也、父その僕等に曰けるは至も美服を持來りて之に衣せ其指に環をはめ其足に履を穿せよ、また肥たる犢を牽來りて宰れ我儕食して樂まん、是わが子死て復生うしなひて復得たれば也とて彼等と共に樂み始む。

「エホバの己をおそるゝ者をあはれみ給ふことは父がその子をあはれむが如し」詩百三篇十三節とあるが如く、舊約書中に神を以て父とせしことはないではないが、それは極めて稀である。新約時代に入りてキリストの眞使命は實に父なる神を顯はし給ふに在つた。彼は實に此偶然の隱喩をば滿腔の熱血をそそぎて主張し、之を宗教上萬古不動の樞軸となし給うた。父なる言葉はキリストに由て神を呼ぶ確定的名稱となつたのである。

イエスは父なる神の賜を各種の方面より顯はし給うた。『夫天の父は其日を善者に

も悪者にも照し、雨を義き者にも義からざる者にも降せ給へり」神は今日野に在りて明日爐に投入らるゝ草をも如此よそはせ給へば況て爾曹をや」爾曹の頭の髪また皆數へらる」と。以て神の恩の豊かなると、其御保護の周到なるを知る。然れども神の人に對する最大の賜は外にある、其れは罪の赦しである。此賜は馬太傳第六章十四節「爾曹もし人の罪を免さば天に在ます爾曹の父も亦なんぢを免し給はん」との御言葉と馬太傳第十八章二十三節より三十五節無慈悲な臣下の喩とに顯はれて居る。然し此最大の賜、即ち福音の心髓とも稱すべき罪の赦しは、路加傳第十五章放蕩息の譬に於て最も莊重なる解釋を得て居るのである。

偕此の放蕩息の事を考へて見れば、彼は其幼少の時に當つて、親に優る有難い者はなかつたのであつたが、年長するに及んで、親の財産に目がつき、之が欲しくなつた。彼の心は人格者と物質の間に彷徨ひ、次第に人よりも金を重んずる様になつた。財産を求むるは悪事でない、人間自然の要求である。然し人よりも物を重んずる様になれば其所に恐るべき危険が伏在する。古今の哲人が所有慾について厳しく

誠めたのは之が爲めである。此の放蕩息は親よりも親の所有物が有難くなつた。之が悲劇の本である、富は人々を分離する、物を有つと人に遠ざかる傾向がある、此放蕩息は親の資産を貰ふや否や、家を出で遠國へ旅立ちした。彼は金の有る間に到處に歡待されて一時は愉快であつた。所有物は人間一部の要求を満たす事は勿論であるが、人間の無限性を満たすとは出来ぬ、而して動もすれば之が墮落の原因となり、大なる窮乏の基となるのである。放蕩息はあはれ此の苦き經驗を嘗めたのである。金はなくなり、飢饉に襲はれ、食ふに食なく豕の食する豆莢を以て其腹を充さんと思ふ程なるに誰一人顧る者無きに至る。是れ實に神を離れ罪を犯せる人間の心理状態である。此時に當り若し彼の心に一道の光明を認むる能はざらんか、悲觀絶望自滅の外はなかつたであらう。幸に彼は故郷の父を思出した、是に於て彼の心は再び希望の光に輝き悔改めて父の家に立ち歸る決心が出来たのである。而かも彼は饑えて居る、生活問題の解決は焦眉の急務であつた「父の家には食物餘れる」とは第一彼の心に浮びし思想であつて之れ第一の要求である。彼が父の家に歸

ると同時に此要求は満たされた。然し今一つの要求が残つて居る、それは心の要求であつて罪の赦しである。彼は父の譲りし財産を放蕩に費し、遠國に放浪して痛く父の心を痛めた、此の不孝の罪が赦されずば、彼の心に平和はない、「我天と汝の前に罪を犯したり」と云ふ深刻なる罪惡の觀念は岩の如く彼の心を壓して、彼は此の大罪を懺悔せずしては居られない。彼は父の前に跪いて云ふべき事を獨語した、「我天と汝の前に罪を犯したれば汝の子と稱するに足らざるなり汝の僕の一人の如く我をなし給へ」と、以前の願ひとは大に異なつて居る「我が得べき身代を我に與へよ」「汝の僕の一人の如く我をなし給へ」二者を比較せば物と人、自我の満足と謙遜なる奉仕との大差あるを見る。此切なる要求に答ふる者なきか、慈愛の父は此要求を満たすに餘りあり、「尙とほく有りしに其父かれを見て憫み趨往き其頸を抱きて接吻しぬ」彼は父の前に不孝の罪を懺悔し、父の赦しを得て爰に再生の人となり、彼の品性は全く改造せられて再び父子有親の樂しき關係に入るを得たのである。イエスは其身を以て此眞理を顯はし給うた。

「イエスパンを取て祝し之をさき弟子に與へ曰けるは取て食へこれは我身なり、また杯を取て謝し彼等に與て曰けるは爾曹みな此杯より飲め、これ新約の我血にして罪を赦さんさて衆の人の爲に流所のもの也」(馬太傳廿六章廿六節以下)

乃ち知る、イエスが十字架の上に身命を捨て給ひしは罪の赦しの爲なるを。我等は此の驚くべき事實により天父が我等の罪を赦し給ふを知り、父の許に立ち歸る勇氣勃々たるを禁じ得ないのである。之れ實に福音の心髓であつて皇天特殊の恩寵、最大の賜である。

思ふに現代人は此の放蕩息の如く、天父を離れ遠國へ旅立ちした、而して動もすれば萬物の所有主、人類の父なる神を否定し、物質の萬能を信じ、物質を研究するを以て唯一の學問と心得、所有物を増殖するを以て人生の目的とし、個人も國家も慾張りすぎた。ヤコブは曰つた「爾曹の中の戦闘と争競は何より來しや爾曹の百體の中に戦ふ所の慾より來しに非すや」と、今回の大戦亂の遠因は確かに、神を離れ物に執着した不信の罪である。而して今や其非を悟り悔改めて天父の許に立ち歸ら

ねばならぬ時が来た。

### 山上の垂訓

(馬太傳第五、六、七章)

イエス許多の人を見て山に登り坐し給ひければ弟子等も其下に來れり。

山上の垂訓はイエスが何人に授け給ひし教訓なるか、是れ此の大訓を了解するに大切なる問題である。此の大訓はイエスの御教を信ずる天國民に授け給ひし教訓である。天國は神を父とし人類を兄弟とする家族的愛の行はるゝ最高最善の理想的の國であつて、其道義の標準は極めて高いものである。其幸福は此世の榮枯盛衰を超越し、貧者は貧者のまゝ、病者は病者のまゝ、瀕死の人は瀕死のまゝ、不遇者は不遇者のまゝ得らるゝ不窮の幸福である。イエスはこの大訓を垂れ給ふ時、聽衆中こゝに達する者あるを先見し、之を祝福し、且つ彼等の守るべき道を教へ給うたのである。されば此の垂訓は世の學者輩が冷かなる理窟を併べ立てたる講演とは全然其選を異にし、無限の愛心より自然に溢れ出でたる教訓である。其用語は學術の語にあ

らずして通俗の語である、而かも簡單にして無限の力が漲つに居る。其ればかりでない、其教訓の背後に絶大の人格者を認むるとが出来、教訓を味ふと共にその人格者に接觸する事が大切である。

イエスの居まし給ふ所、人々群がり集うて、忽ち雑沓の巷と化した。十二弟子を始め、學者パリサイ人病者貧人漁夫兵卒暴漢野次馬、玉石混淆、種々雑多の人々がイエスを取圍んで居た。

イエス山に登り給ひしは聽衆を聖別せん爲めであつたらうと思はれる。熱心なる弟子等はイエスに隨つて山に登り此の貴き聖訓を聽く事を得たが、山下に止まりし不精者は不幸にして聽く事を得なかつた。弟子等は山上に登り俗界を脱し、心氣晴々として胸宇自ら開け、御教を受け入るゝ心の準備が出来た。イエス山上に坐し、天地人生を大觀し、徐ろに口を啓き天國の福音を過去現在未來に通じて説き給うた。

天國民の祝福 (馬太傳第五章三節より十二節迄)

イエス口を啓て彼等に教へ曰けるは、心の貧乏者は福なり、天國は即ち其人の有なれば也、哀む者は福なり其人は安慰を得べければ也、柔和なる者は福なり其人は地を嗣ぐことを得べければ也、饑渴こそ義を慕ふ者は福也其人は飽く事を得べければ也、矜恤ある者は福也其人は矜恤を得べければなり、心の清き者は福なり、其人は神を見こさを得べければ也、和平を求むる者は福なり其人は神の子と稱らる可ればなり、義こそこの爲めに責らるる者は福なり天國は即ち其人の有なれば也、我ために人なんぢらを誦評また迫害いつはりて各様の悪言をいはん其時は爾曹福なり、善び樂め天に於て爾曹の報おほければ也、そは爾曹より前の預言者をも如此せめたりき。

山上の垂訓は祝福を以て始まる。イエスを慕うて山の上に登りし弟子等の劈頭第一に耳に響きし聖語は即ち祝福であつた。「心の貧乏者は福なり、天國は即ち其人のものなればなり」と。心を虚らし、謙りて神の御教を聴く者は福である、其人は此世から天國を我が所有とすることが出来る。「哀む者は福なり、其人は慰めを得べければなり」富み榮えて榮華の夢を見るものは傲慢不遜にして容易に人の説に耳を傾く

るものでない、然し貧乏者病者失敗者己の罪惡を認めて悔む者は、其心碎けて教を聴くやうになる。其人は神の御救ひを蒙りて精神上眞の慰安を得るに至る。「柔和なる者は福なり、其人は地を嗣ぐ事を得べければなり」當時ローマの金力と兵力は世を支配して居た、所謂軍國主義の世の中で、富國強兵は時人の理想であつた。イエスは世人と全く見を異にし、柔和なる者、人道を重んずる者、之が世界を支配すると教へ給うた。腕力や金力は此世を支配する大勢力であるが、其れは一時の現象である。子供のやうな心、子供のやうな平和、其は何時でも怒りと驚きと恐れとを取去る力である。「また白人の入込んだ事のない亞非利加コンゴ河邊の或村へ、宣教師の一家族が上陸したが、土人は怒りと驚きと恐れとの爲めに、宣教師を殺さうと鎗を以て對つた。言語の通ぜぬ宣教師は身振り手眞似で他意なきを示したが、一向聞き入れる様子がなかつた。宣教師は小さい我が子を抱き上げて土人の目の前に差向けた。子供は土人を見ても鎗を見ても、恐れずニコニコ笑つた居た。之が土人の心を和らげて安全を信ぜしめる最良の策であつた、斯くて彼等の間には親しい友

情が結ばれた」と云ふ事である。柔和なる者に斯る力がある、サールベルは人を心服させる力でない。此世を神より受け嗣ぎて永久に支配するものは、武力や腕力でない、柔和なる徳の力である。今や之が適切なる實例を見つゝあるのである。『饑渴く如く義を慕ふものは福なり、其人は飽くことを得なければなり』正義は人間の理想である、何人も正義を行はざるべからざるを知る。人が義助、善兵衛、正義、正直と命名するを見ても分かる。然し義助が不義を行ひ、善兵衛が不善をなし、正義、正直が、詐偽を働く、名實相協ひ、言行一致するは容易の事でない。然し饑渴く如く神の義を慕ふ者は何れの日か義人になれる、神は其志を嘉みし給うて幸福なる者となし給ふ。斯る人は安心満足が得らるゝのである。『矜恤ある者は福なり、其人は矜恤を得なければなり』矜恤あるものとは同情の涙ある人である、其人は神からも人からも矜恤をうけ幸福なるものである。『心の清き者は福なり、其人は神を見る事を得なければなり』心の清きは、心の貧きよりも遙かに進んだ状態である、清水の酸水二元素の外何物も混ぜざる如く、神を愛し人を愛する外、何等心に挟まな

い有様を云ふのである。長さ廣さ厚さある物體は肉眼で見ると、地球の圓きは智識の眼を以て見る、靈なる神は何を以て見奉るか、靈眼を以て見るの外はない、曇りなき靈、これ天地の神を見得る眼である。神を見るものは何者をも恐れず、行爲に陰日向がない。千萬金を何年預けて置いても一錢半錢胡魔化するやうなことをせぬ。憂き雲の身を蔽ふ事あるも、胸中は希望の光に輝いて居る。

君不看高山腰脚纏風雨 日光永遠照其巔

之れ神を見る者の心鏡である。『平和を求むる者は福なり、其人は神の子と稱へらるべければなり』此世は罪惡の雲霧に遮られ、神と人との間に和らぎを缺きたる結果、人と人との間も亦平和を失ひ、喧嘩争闘止む時なき有様である。之を救済せんが爲めに努力する者は福なる人であつて神の子と稱へらるゝ。今や世界は戦争の慘禍を實驗し、平和は世界の大問題となり、キリストの聖語は世界偉人の心を動かし、平和の爲め最善の努力を拂ひつゝあるは祝すべき事である。『義しき事の爲めに責めらるゝ者は福なり、天國は即ち其人のものなればなり』日本基督教史に宣教師フ

エルナンデの迫害を受けし状況を叙して、「一日フェルナンデは市街（山口）繁華の場所しよたつに立て常つねの如く熱心教を説きつゝあつたが、乍ち數多の人々集ひ來りて其の周圍しうかに群集し道行く人も歩を停めて見物し、貴顯の士人も多く其中そのうちに雜集した。斯くてフェルナンデの音聲おんせいます／＼熱烈となり至誠面しせいめんにあらはれ、一心不亂の態度に少からず聽衆を感動せしめ其の所説の妙所めうしよに至り、人々覺えず感嘆の聲を發し、將に熱狂せんとせし其利那突然聽衆の中より跳り出でたる惡漢があり、乍ちフェルナンデの傍に走り行き、大聲を發して、是外道奴と罵り忽ち其面に唾して去つた。衆手を打て之を笑ひ、且窃にフェルナンデの態度を伺ひ見しに、彼は更に動する色なく從容として靜かに手巾を出して其面を拭ひ、毫も暴行を意に介せざるものゝ如く、更に説教をつけたが、見る者其温厚にして忍耐ふかさに感服した。是時聽衆中に一人の紳士あり、平常痛く切支丹宗を排斥せしが、此場に於るフェルナンデの態度を目撃して深く其忍耐寛容の精神に感じ、其説教の終りし後、直にザビエそのいへを其家に訪ひ、切支丹の教義を質問し、遂に回心してバプテスマを受くるやうになつた。こ

の事一たび市中しちうに傳はるや、此時まで他人の思惑を憚りて逡巡し、其の信仰を秘せし者共は皆争うて新宗教に歸依し、二ヶ月にバプテスマを受けたもの五百人の多數に達した」と。是れ實に天國民が迫害に處するの道であつて、逆さかに來る者を順じゆんに受け、禍を轉じて福となし、逆境ぎやくきやうにも欣喜踴躍感謝讚美するのである。

『百戰百勝は善の善なるものにあらず、戰はずして敵の兵を服するは善の善なるものなり』

以上の聖語を讀みて我等はイエスの教へ給ふ幸福の意義を悟るとが出来る。當時弟子等は此世の王國の榮華を夢みて居た。富貴は彼等の理想で、幸福とは所有物の饒かなるものであつた。イエスの彼等に告げ給ふ所は全く之に異り、幸福は物にあらずして心に在るのである。以上に掲ぐる心的状態の人々は其所有物の有無に拘らず、幸福なる人である。キリストを信ずる者は何人も此幸福を得らるゝのである。

天國民の責任 (同十三節より十七節迄)

爾曹は地の鹽なり鹽もし其味を失はば何を以か故の味に復さん後は用なし外に棄られて人に踐るゝ而已、爾曹は世の光なり、山の上に建られたる城は隠るゝここを得ず、燈を燃して斗の下におく者なし、燭臺に置き家に在すべの物を照さん、此の如く人々の前に爾曹の光を耀かせ然れば人々なんぢらの善行を見、て天に在す爾曹の父を榮むべし。

創世記十二章二節「我汝を祝み汝の名を大ならしめん汝は社福の基となるべし」之れ神がアブラハムに約束し給ひし御言葉である。神の特別なる祝福を蒙りしものは、世の社福の基となる責任ある事は創世の始から定まつて居る。イエスは祝福に續いて天國民の世に對する責任を説き給うた。爾曹は地の鹽なり、ガリラヤ湖邊に漁業を營み、魚類に鹽するとに慣れたる弟子等には特に適切な譬である。天の祝福を蒙りし者は社會の腐敗を防ぐ防腐劑とならねばならぬ。鹽は鹹くある、地は之を好まない。然し地は自ら己れの腐敗を防止する能力を有たない。故に天國民は鹽となつて其腐敗を防止せねばならぬ。而して此の譬喩は此の社會も天國民も時として墮落腐敗する悲むべき事實を暗示して居る。物質的文明の發達するにつれて、世は

墮落腐敗する、天國民も財産の増し加はる時、注意しないと知らずく俗化して鹽の味を失ふ様になる。そして第一神に捨てられ、第二人に踐まるゝ運命に陥る。故にイエスは大なる警戒を加へ給うた。「爾曹は世の光なり」光は積極的の働きを顯はすものである、キリストの教は厭世隱遁の教に反對する、キリストの弟子たる者は世の光となつて廣く暗黒世界を照らさねばならぬ。爾曹は世の光なり、光の傳道者でない、天國の眞理を耳に聴き口に之を傳へる者でない、彼等自ら眞理を身に行ひ、光其物となつて四邊を照らす燈明臺とならねばならぬと教へ給うた。

基督と舊約との關係 (同十七節より廿節迄)

舊來の教を重ずるは人情の常である、特にユダヤ人は傳説を尊び、古より傳はりし律法と預言を極めて重ずる民である。而してキリストは之を破壊する者ではなからうかと痛く氣遣うて居た。故にキリストは此處に新たなる教を説き給ふに當り、先づ己の舊約に對する態度を明かにせられた。キリストは舊來の教を破壊する爲め



に來らず却て之を成就する爲めに來れりと宣言せられた。而して彼は正義の一層重んずべきを主張し、當時の學者やパリサイ人の偽善なる行爲に對して、大に反對の精神を顯はし給うた。キリスト教の他教に對する態度も亦之と同様である。佛教信者や儒者の中にはキリスト教に改宗するを以て、祖先に對し罪を犯すもの、如く思ふものがあるが、我國の聰明なる祖先は儒教佛教の如き外來の教を信奉して我國を文明に進めて來たのである。我等が今完全なる宗教を信奉し、從來の教の成し遂げざりし所を成就するは祖先の遺志を完うする者と申さねばならぬ。

人に對する道—道德の方面 (同廿一節より四十八節迄)

イエスは人が人に對して行ふべき道德と、人が神に對して守るべき宗教とを一つに結びつけ給うた。宗教と道德とは離るゝ事の出來ない性質のものである。イエスの教によれば宗教と道德は其根本に於て一致して居る。故に今學ぶ處は道德の方面ではあるが決して宗教を離れた道德でない、其絶頂に達する時は、宗教なくしては

行はれぬ道德である。古の人に告げて殺すこと勿れ、殺す者は審判にあづからんと云へることあるは汝等が聞きし所なり、されどわれ汝等に告げん」と、イエスは道德の標準を一層高くし深くすべきことを教へ給うた。彼は憤怒と憎惡の感情をば舊制度の殺人罪と同程度に考ふべきことを示し給うた。イエスの道德は形式的道德でない、根本に直入し、心髓に徹底したる精神的道德である。我等はイエスの教を聞く時、在まざる所なく知らざる所なき全能者の前に赤裸々に立つ心地がする。イエスは斯く罪惡を自覺する者に對して、悔改して、恩惠の祭壇に近づくべきことを教へ給うた。姦淫罪に對しても、同じく罪は心に在るものとして警戒を加へられた。家庭は天國の模型、此世に於て最も理想に近きもの。一夫一婦の道は人倫の大本、天地自然の約束、此道亂れて道德地を拂ふは當然である。故に何者を犠牲としても品行を全うし、家庭の清潔を有つべきことを教へられた。是れキリスト教道德の大特長である。離婚數の夥き、醜業婦出稼の盛なる、公娼制度の公然行はるゝ、男女貞操の亂れたる我國の如きは、特に此の教の必要を感じずには居られない。次に

天國民は誓を要せず、是々否々と云ふ可き事を教へられた。日本人は何故虚言をつくか、何故約束を違へるか、何故絹糸の中に屑を混ぜるか、澱粉に餌を入れるか、此等の質問の答辯には大に閉口するが、之を矯正するは焦眉の急務である。是々否々と云ふ教も亦特に我國民に適切なるを覺ゆるのである。進で復讐を戒められた。「目にて目を償ひ、齒にて齒を償へ」とは裁判を公平にして、個人的復讐を防ぐ爲めであつた。然るにバリサイ人は之を曲解して個人的復讐を以て合法の所爲なりと教へた、是れ實に律法の精神を破壊するものである。イエスは律法の精神を推し擴げて之を天國民の律法となし給うた、之れ實に律法の精神を完全圓滿に成就するものと云はねばならぬ。火は火を以て消す事能はず、水を以て消さねばならぬ。人なんぢの右の頬を批ば亦はかの頬をも轉して之に向よとの教は復讐心を制し、寛大なる心を以て己を害する者に對すべき事を教へられたのである。是れ天國民が社會に飛び込んで、萬敵の中に立つて道の證明を立つるに當り取るべき態度で、天國の民たる者は其使命に對して特別なる自制を要求されたのである。前述のフェルナンデ

は此の教訓を實行したものである。更に進んで敵を愛すべきことを教へ給うた。是れ道德の絶頂、諸罪惡の根絶である。「爾の隣を愛みて其敵を憾むべし」とて當時の人々は律法に在る所の隣の意味を極めて狭義に解釋し、安否を兄弟にのみ問ひ、己を愛する者のみを愛して、敵を憾むべしと云うて居た。イエスは隣の意味を極度まで擴張して、親戚朋友は申すまでもなく、大人も小兒も學者も無學者も盲者も跛者も癩病人も異邦人も敵までも其中に入れ、世界の人類は皆隣として愛すべき事を教へられた。之より高尚偉大なる教はない。之れ生來のまゝなる人の到達し得る處でない、彼等は無理と云ひ、實行不可能と云ふであらふ、然し天國の民、神の子供には不可能でない。イエスは此の教を説き給ふ時「如此するは天に在ます爾曹の父の子とならん爲なり、夫天の父は其日を善者にも惡者にも照し、雨を義者にも義しからざるものにも降せ給へり、是故に天に在す爾曹の父の完全が如く爾曹も完全すべし」と曰ひ給うた。斯る道德は、人間が神の子供となり、神と父子の關係に入り、人類を兄弟と心得、天父の愛を模範とする者にあらざれば實行する事は不可能

である。天國の民たる者は己を愛する者を愛し、安否を兄弟にのみ問ふが如き低度の道徳を以て、満足すべきものでない。イエスは此の最高の道徳を弟子等に要求し給うた。而して此の域に到達する天國民は終始愛を以て一貫し、如何に仕向けられても、決してその方針を變更するものでない。人が憎んでも、恨んでも、反對しても、迫害しても、十字架につけても、愛以て之を貫くのである。キリストは自ら斯く行ひ、十字架上に於て敵の爲め祈り給うた。此の教訓は從來個人と家庭の間に行はれ、未だ國際間には行はれて居なかつたが、今や人類は大に覺醒して此の大訓を國際間に實行せんと努力するやうになつた。

神に對する道—宗教の方面 (同六章一節より十八節迄)

施濟、祈禱、斷食に就ての教であるが、イエスは深く其精神に入りて教へ給ふ事前章と同じである。何れも己の名譽の爲めにしてはならぬ。斯る動機でした事は神の前に何等價値がない、慈善事業も神を信ずる信念から來らざれば、源の無い川の如

きものである。永遠盡きざる河の流は深山の人跡到らざる處に其源を發する。眞の慈善事業は其源を最高至上の神に發せねばならぬ。世間の名譽や表彰を動機として起る慈善事業は源の無い川と一般早晚枯渴する時が來る。

祈禱は宗教の生命である、祈禱は神と人との靈交である。其れを人に見せん爲めにするが如きは全然誤つて居る。イエスはこゝに誤れる祈禱を指摘して、眞正の祈禱を示し給うた。

天に在ます我儕の父、願くは爾名を尊崇させ給へ、爾國を臨らせ給へ、爾旨の天に成ごこく地にも成せ給へ、我儕の日用の糧を今日も與へたまへ、我儕に負債ある者を我儕がゆるす如く我儕の負債をも免たまへ、我儕を試探は遇せず惡より拯出し給へ、國と權と榮は窮りなく爾の者なればなりアーメン

簡單にして其内容極めて豊富である、「天に在ます我儕の父」此一語、信仰生活の全部を包有して居る。神を父と呼び得る者は、信賴敬慕讚嘆奉仕の精神溢れざるを得ない筈である。而かも罪の爲めに精神鈍れ、實行不徹底なれば吾も人もより正しくより深く神を崇め奉るに至らしめ給へと祈るのである。又福音の一日も早く世界

に普及し、神は父、人類は兄弟たるの意義を表彰し、一家團欒の状態を實現するや、之が爲め何事かを爲さしめ給へと祈る「我儕の日用の糧を今日も與へたまへ」我儕と複數の語を用ゐたるは、他人の上をも思ひ遣り共に神の祐助を蒙り、相携へて神の聖業に參與するに當り、驕奢に耽る事なく質素儉約單純生活を營み、其日々に必要なる糧を與へられん事を祈る「我儕の負債あるものを我儕がゆるす如く我儕の負債をも免したまへ」吾人退きて我身を顧みれば、身は罪惡の塊にして滅亡の淵に陥りつゝある、神よ罪人なる我を憫み給へと哀訴して罪の赦しを祈らざるを得ないのである。「我儕を試探に遇せず」暴虎馮河の勇を慎み、畏れ肅みて己が救拯を全うせんとを祈るべきである。而かも惡魔と戦はざる可からざる場合には挺身奮闘敵を打破らざれば息まざるの勇氣がなくてはならぬ。「國と權と榮は爾の者なればなり」讚嘆の聲、アメンは眞實無妄少も欺がざるの意。斷食は狹義に解せば、神に事へる爲め、食事を斷つ事であるが、廣義に解せば肉につける諸慾を制する事である。キリスト教は禁慾主義でない、又惡き意味の自然主義でもない、然し肉の慾を

恣にし、贅澤虚飾に耽る事は大禁物である。パリサイ人の如く形式的に斷食する必要はないが、精神的斷食は大に必要である。施濟、祈禱、斷食、此の三つものは相互は關聯して居る。祈禱を以て最高の神に近づけば近づく程、謙る心が起り自ら肉の慾を制する様になる。さすれば生活上に餘裕を生じて自然人に施すことが出来る。斯くして慈善事業は永遠つぎざる川の如く社會を澤すのである。

物に對する道 (同十九節より三十四節迄)

我等は既に神と人とに對する教を學んだが、十九節以下は物に對する教である。財産に伴ふ危険ほど恐る可きものはない。イエスは此の事を深く心に感じ給うて、放蕩飲酒の罪禍以上に屢々之を戒められたやうである。勤儉の生める財産は大なる道徳力であつて、人格發現の條件となり、品性陶冶の鼓舞獎勵となり、又獨立自由を維持する力であるが、或る食物が有害になり、過度の肥料が植物を殺す如く、やがて之が人心を腐敗せしめ、人と人との間を分離する隔の籬を造り、人間の獨立自

由を壓迫する道具となるのである。人間の射利心はやゝもすれば常軌を逸して豺狼の慾を肆にし、智力も良心も悉く之が爲めに壓倒されて、世は金づくで出来、金の問題より外に何物もなく、人の評價も此の標準に依つて行はれ、結婚も之により、政治もこゝに動き、戦争も之が爲めに起り、信仰も道德も藝術も押退けられて人生は破滅を招くやうになる。人間の最大禍根にして天國を破壊するものは財の慾である。イエスが財産に注意し給ひしは經濟學の見地からでない、人間の高貴なる性質を腐敗せしめ、良心の明を暗まし、神を捨つるに至らしむる點であつた。イエスは我等の資力は委託物にして絶對的財産でない事を主張し、痛切に貪慾を戒められた。又衣食に就て思ひ煩ふまじき事を教へ給うた。思ひ煩ふは貪慾ほどに惡事でないが、神を信ずる信念の足らざるより來るが故に財を本位とする貪慾と其根柢は同一である。イエスは神が人類に尊貴なるものを與へ給ひし事を思い出ださしめ、天空の鳥、野の百合花を材料とし、絶妙の詩を以て取越し苦勞の無益なる事を教へられた。大なる者を求めよ、然らば小なるもの加へられ、天のものを求めよ然らば

地のものは添へらるゝと。

財産の所有者は、神より委託された財産を如何に用ゆべきかを研究し、之を最善の用に撒布する爲め努力せねばならぬ。又食物が有害とならざるやう、肥料が植物を殺さざるやう、注意するが如く、財産の所有者は何處から財産が餘分になり、有害となるかを研究し之を適度に用ゆるは極めて大切な事であると思ふ。

識別の能力 (同七章一節より六節迄)

己の缺點を顧みず、人の缺點を大きく見て、之を批難するは人の陥り易き罪惡である。當時のバリサイ人は特に此の罪惡に陥つて居た。イエスは此の罪惡を天國民の中より根絶せん事を欲し給うた。六節は天國民は神の教を宣傳するに當り、人を識別する能力なかるべからざることを教へ給うたのである。

祈禱と道德 (同七節より十二節迄)

以上説き給ひし眞理の高さ深さ廣さ長さを考ふれば考ふる程、實行難を感ぜないものは無い、誰か能く之に堪へんやとは、萬人の異口同音に唱ふる所であらう。七節以下は之が答である。祈禱は天國民の最大特權である、自力で不可能の事も神力を蒙る時は可能となる。「求めよ然らば與へられん」求めるは人の態度、與へるは神の態度である。或信者の家に一人の小女がある、彼女は六歳にして二十町もある幼稚園に日々通うて居る。或日の事、父親は小女に向ひ、神に祈るとを勧めしが、小女は小さき手を膝に置き「天の父さま幼稚園をもつと近ひ所に持つて来て下さいアメン」と祈つた。父はかねて幼稚園が遠き故近き所に移轉せんと思ひながら果さずして居たのであるが、今此の小女の祈を聞き早速家を幼稚園の近くに移したと云ふ話がある。小女の父は小女の願の通り幼稚園を近くに持つて来なかつた。然し小女の爲めを謀つた。天父も亦我等の願ひ通り應答し賜はんでも、祈れば必ず我等に善賜を與へ賜ふ。イエスは爰に祈禱の特權と約束とを同時に與へられた。六章の主の祈禱中に人の罪を免すべき事を反覆教へられたが、此處にも天父に子の如く愛せら

れ、祈禱を聽かれんには、人に對して兄弟的愛を有たねばならぬ事を教へらる、是故と云ふ語、祈禱と道德の關係を示して居る。天國民が神に對する父子の關係は、祈禱によりて具體的となり、又人に對する兄弟的關係は一人にせられんと思ふ事は人にも亦其如くせよ」との格言を實行する事によりて、事實となる。而して天父と父子の關係に入りて祈禱が聽かれ、人々と兄弟的關係に入りて格言の實行が出来る。是が法律と預言を成就する所以であると結ばれた。

生命の道と滅亡の道 (同十三節より廿九節迄)

人生の行路千種萬別、數限りない様であるが、イエスが最高の位置から、永遠の眼を以て人生を大觀し給ふ時、生命に至る信仰の道と、滅亡に至る不信の途と此の二途あるのみ。生命の途は人の品性に本づく精神的のもので、克己謙遜犠牲性を要求するが故に容易でない、之に入るものは少い。之に反して滅亡に至る道は廣く其門は大なり、之より入るものは多いのである。

將來の警戒 (同十五節より二十節迄)

イエスは是迄過去を顧み、律法と預言を成就するものなることを各種の方面より説き示し、天國民の現在に於て守るべき道を教へ給ひしが、是より未來を先見し、天國民の遭遇する危険を豫言し、大なる警戒を加へ給うた。天國の門内にもキリストの名を冒す偽教師が顯はれる、之に欺かれざるやう警戒を要する。而して之を識別する方法は、其説によらず、其行爲によるべき事を示された。

大審判 (同二十一節以下)

我を召て主よ主よと曰ふもの盡く天國に入に非ず唯これに入者に我大に在す父の旨に違ふ者のみ也。其日われに語りし主よ主よの名に託てなしへ主の名に託て鬼をなほ主の名に託て多く異能を行しに非ずやと云もの多からん。其時かれらに告われ嘗て爾曹を知らず悪をなす者よ我を離去せよと曰ん。是故に凡て我この言を聽て行ふ者を磐の上に家を建たる智人に譬へん。雨ふり大水いで風ふきて其家を撞ごも倒るゝことなる人々その教を駭きあへり。そは學者の如くならず、權威を有る者の如く教たまへば也。

是磐を基礎と爲たれば也。凡て我この言を聽て行はざる者を沙の上に家を建たる愚なる人に譬へん。雨ふり大水いで風ふきて其家を撞ごも倒るゝことなる人々その教を駭きあへり。そは學者の如くならず、權威を有る者の如く教たまへば也。

こゝに至つて教義は愈々開展して、偽教師より偽信者に及び、現世より來世に擴がつて來た。今や眼界は無限大になつた。大審判の日はイエスの眼前に開展し、審判の座に群がる無数の群衆を見給うた。イエスは最早や教師でない、大審判者である。審判の日遅かりし爲め、不信の徒は主を欺き、審判を免れんとして種々偽りの口實を併べ立つる事を預言し給うた。こゝに於て主は自ら神の權威を露はし給はずには居られない、彼は審判を語り給ふのみならず、自ら審判者たる事を顯はし給うた。此の事を語り給ふ時、イエスの御顔は日の如く輝き、群衆は其赫々たる威光に打たれ、自ら襟を正すを禁じ得なかつたであらう「集りたる人々その教を駭きあへり、そは學者の如くならず、權威を有る者の如く教へ給へばなり」とある。而して今やイエスの見給ふ者は道を聽く者と、聽かざる者との二階級でない、道を聽き

しものである、而かも之を行ふ者と行はざる者としてである。道を行ふ者は岩の上に家を建てたる賢者の如く、之を行はざる者は沙上に家を建てたる愚人の如しと。平時は異なる所なきが如きも一朝風吹き大雨降り洪水其家を衝けば賢愚立ちどころに顯はる。最後の勝利はイエスの御教を實行する者に歸するのである。

創造と改造(終)

大正八年六月廿一日印刷  
大正八年六月廿六日發行

定價金參拾錢

著者 小北寅之助

東京市京橋區明石町八番地  
基督教興文協會代表者

發行者 エス・エチ・ウエンライト

印刷者 東京市京橋區銀座四丁目一番地  
村岡徹三

印刷所 東京市京橋區銀座四丁目一番地  
福音印刷株式會社

發行所 東京市京橋區振替東京  
日本基督教興文協會

發賣所 警醒社・教文館・福音書店・基督教書類會社・岩波書店  
丸善書店





179  
959

終

